

第三章 自由意志

人間は高度に思考が進化発達した存在である。その強力な思考の流れは、意識場の中に凝り固まった自己を固定化（実体化）する。そしてさらに思考は、意識場に論理的秩序性を見出し、その秩序性を満たす実体（モノ）を、自己に対峙する非自己として外に措定する。ここにおいて思考は、「自己」と「モノ（非自己）」の二種の揺るぎない実体を生み出すことになる。

そしてさらに思考は、実体だけではなく、この世に存在する「力」も二種に分断する。二つのうち一つは、自己に属する力である。それは自由意志と呼ばれる。そしてもう一つは、モノに属する力である。それは物理的な力や作用のことである。

日常生活においては、この二つの（見かけ上）異質な力は共に実存していると信じられている。自然世界を支配するのは物理的な力であり、その論理的秩序性は自然法則として理解されている。それに対して、個人の意識的な行動を支配するのは自由意志である。私が選挙で誰を投票するのか、ハネムーンに何時何処に行くかを決めるのは、個人の自由意志による選択である。ハリケーンの行き先を決定するのは自然法則であるが、ハネムーンの行き先を決定するのは自由意志である。社会生活上、この二種の力は混同されること無く明瞭に区別されている。落下した石の下敷きとなれば自然法則による自然災害となるが、それが誰かの明確な意志や意図によって落とされたならば、それは人災となり、その行為の結果に対する社会的責任が厳しく問われることになる。日常生活においては、自己に属する力（自由意志）とモノに属する力（物理的な力）の二つの異質な力は明瞭に区別されながらも共存していると考えられており、私たちの社会生活はそれを前提として成り立っている。

三章一節 自己を実体化しない（人無我）

私たちは自己と呼ばれる実体があって、その自己の自由な意志決定が自分自身の行動を支配していると感じている。自己も、自己に属する力（自由意志）も、それが存在すると感じられる心的事実は疑いようが無い。しかしながら、もし私たちがそのような主観的な印象を根拠として、世の中には自己という他と分離独立した実体があって、それが世の中の因果の法則とはまるで無関係に自己の力を行使しているのが真実であると考えれば、それは現象の本質を捉え損なっている。現象の真の在り方と現れ方を

区別せずに混同している。「自己」と「自由意志」の本来の意味を把握したいと願うならば、私たちは自分自身の認知から行動に至るまでのプロセスを正しく観察分析して理解せねばならない。

(一) 無意識的な行動系

普段の生活の中では、私たちは自分の行動のほとんどすべてを自分の意志によって決定していると感じているかと思う。自らが生み出す一切の行動は、自分自身が支配、制御している感覚を強くもっている。

しかしながら、自分自身の行動や動作の一つ一つをよく観察してみれば分かると思うが、実際の人間の行動の多くは無意識的な自動的行為である。反射や本能的行動、姿勢の調整や歩行といった基本的な運動動作、普段から何気なく繰り返している習慣的行動、こういった比較的単純な行動や動作の一つ一つは特別に意識されなくても、無意識下で進行する。特段、私たちが気にかけてやらなくとも、基本的あるいは習慣的な行動については「体」が自動的に上手くやってくれている。

毎日の生活の中での自覚された意図的な行動は、このような無意識的な行動の延長線上に存在している。無意識的な行動と意識的な行動は連続した一連のプロセスであり、通常その二つは明瞭に区別されたかたちで認知されることはない。それらは分断無くなめらかに連続しているように感じられる。例えば、目の前にボールが飛んできて、とっさに身をかがめて避ける状況を考えてみよう。この場合、視覚的刺激に反応して開始される身体の回避動作は、無意識的な反射的行動によって開始されている。その反射的に動く身体動作の後に、意識的な知覚や判断、状況に応じた適切な行動が連続して始まることになる。

最近の科学の知見によれば、刺激が加わってから、それが意識の舞台に上るようになるまでの時間は私たちが普段感じているよりもかなり遅いものであり、およそ二五〇ミリ秒以上の時間を要すると言う。そのような刺激が意識化されるまでの数百ミリ秒レベルの時間は、突如出現した危険を回避したり、プロのスポーツ選手のように素早い反応動作を必要とする場合は、あまりにも長い時間であるように思える。もし、人間が意識的な行動しか利用できないのであれば、プロのテニス選手のように時速二〇〇kmを超えるサーブを打ち返したり、ボクシング選手のように目の前から繰り出される高速のパンチをかわしたりすることは非常に難しくなるだろう。しかしながら実際のところは、意識的な行動が開始される以前に、即時的で無意識的な行動が利用されることによって、とっさの反応や、スムーズで適切な運動行動が可能となっている。

人間が意識無しでどこまで行動できるかを理解しようと思えば、意識喪失を伴うてんかん発作である「欠神発作^{けっしん}」と、それに続いて起こる自動症（欠神自動症）の症例が参考になるだろう。欠神発作では、意識喪失が突然起こり、ビデオが静止されたように、それまでの運動行為が突然停止する^{*}。そしてその後、意識回復の兆候がまるで無いままに自動的な行動（自動症）が開始される。

次に引用する神経学者のアントニオ・R・ダマシオの症例観察には、欠神発作から欠神自動症、そして回復までの一連の様子が明瞭に描かれており、意識の存在しない人間の行動というものが如何なるものであるかを教えてくれる。

三二年前、壁を灰色に塗った全体が円形の一風変わった診察室で、ある男性が私の向かいに腰を掛けた。天窗を通して降り注ぐ午後の陽光を浴びながら、われわれは静かに話していた。突然、話の途中で男性が黙りこくった。顔は動きを失い、口は開いたまま固まり、目は私の背後の壁の一点をうつろに見据えていた。数秒間、彼はぴくりともしなかった。彼の名を呼んでみたが返事はなかった。それから少し動きはじめ、唇を舐め^な、目は二人の間にあるテーブルへと移った。男性はコーヒーカップと小さな金属製の花瓶を見ているようだった。いや、カップを手にしてコーヒーを飲んだのだから、見ていたにちがいがなかった。私は繰り返し話しかけてみたが、返事はなかった。彼は花瓶に触れた。私は何が起きているのか尋ねてみたが返事はなく、顔にも表情はなかった。彼は私を見ていなかった。そうこうするうちに男性は立ち上がった。この先どうなるのかわからず、私は焦った。彼の名を呼んだが返事はなかった。この状態はいつまでつづく？ そう思っていると男性はくるりと向きを変え、ドアに向かってゆっくり歩き出した。私は立ち上がり、もう一度名前を呼んだ。男性は立ち止まり、私を見た。顔に少し表情が戻っていた。まごついているようだった。もう一度声をかけると、「なんだい？」と言った⁽¹⁾。

欠神自動症の症例が示すように、意識が伴わなくとも私たちの体は、単純ではあるがその場の状況に应答した基本的な運動を行なうことができる。しかしながら、そこには人間らしい行動、高次の精神活動を伴う行動と呼べるものは何も無い。状況に応じた喜怒哀楽の感情の発露は無く、思考や推論、創造的行為も無い。心の通い合うようなコミュニケーションも無く、信念や意志にもとづくような自発的行動も無い。ただ、刺激に应答した単純で機械的な運動が行われるだけである。おそらくそこには、自己の感覚も無いだろうし、自由意志の感覚も無いだろう。自己や自由の感覚を伴う人間らしい行動

^{*} 神経生物学的には、欠神発作時には視床／皮質の神経ループで異常な振動発火が生じることが報告されている。

は、そこに意識が存在してこそ始めて可能となる。

(二) 意識的な行動系

情報の入力処理

このような無意識的なレベルでの認知・行動システム（生体調節、反射、本能的行為、基本的・習慣的運動など）の上に、意識的なレベルでの認知・行動のシステムが連続して積み重ねられることになる。統合場の限定態としての意識場が生じれば、意識の場は空白を嫌い、そこは鮮やかで多彩なクオリア時空間と化す。そこにおいて、各種感覚（色形、音、匂い、味、身体感覚）、記憶情報、イメージ、受（快・不快の感覚）、高次の感情（喜び、嫉妬、不安、恐怖、悲哀、落胆、楽しさ、愛しさ、幸福）、カテゴリー化、意味・価値の付与、言語化、概念化、思考、推論、欲求、意志などといった各種クオリア群の処理プロセスが怒濤の如く進むことになる。これらの内的因子群は、相互に競合／結合、活性化／抑制化しながら平衡化し、統合的なクオリア空間が生み出される。

意識場の統合の範囲は、個人的範囲から社会的範囲へと拡張し、他者や社会、環境との相互作用の中で調整を受けるようになる。統合化は個人的欲求の範囲だけにとどまらず、社会的慣習や倫理的規範も取り入れて進んでいく。

このような無数の情報の入力処理が効率良く進むためには、「注意」と「記憶」という二つの心理的機能が非常に重要なものとなってくる。注意は情報を取捨選択して、情報処理を効率的で状況に応じた適切なものとする。また記憶は情報を保持して、より広く深い意味処理のプロセスを可能にする。

情報の出力処理

このようなクオリア空間での情報の入力処理過程から、情報の出力過程である「行動」が生まれることになる。各種クオリア群の調整、統合のプロセスの過程からは、生理的、情動的、社会的、自己実現的といった様々な階層（統合レベル）での欲求が生まれる。このような幾つもの階層から成る欲求反応は、個体を行動へと駆りたたせることになる。人間においては特に高度に発達した記憶システムや意味処理のメカニズムは、過去から現在、現在から未来へと続く、持続的で計画的な一連の行動を可能にしている。その時々々の今現在の状況が、過去の記憶や未来の目的概念と統合し、個体にとって最適な行動が選択されることになる。

この意識の場の内における認知のシステム（情報の入力処理過程）と行動のシステム（情報の出力処理過程）は、相重なり、相互に調整し合う。認知のシステムは行動のシ

システムを制御する。また、行動の結果は、認知のシステムにフィードバックされて、システムは再編、再調整される。認知と行動の両システムは相互にダイナミックに調整し合いながら、最適化される。

意識の場の内の認知と行動のプロセスの中では、手を離せば必ずモノが下方へ落下するように、一つの現象が必然的に他の一つの現象へと帰結することはない。この総和的システム内には多数の情報が絶え間なく流入し、その都度に、競合、結合、調整、統一されて、常に何らかの新しい認知行動のパターンが生まれ出され続けている。外部環境からの情報の流入、長期記憶からの情報の想起、反応や行動のプロセスからのフィードバックなどによって、総和的システム内は絶え間なくダイナミックに、再編成、再調整され続けている。

このシステムには、「無限大の自由度」がある。システム内の初期状態が一つの最終状態を必然的に決定することはない。そこではリアルタイムでの情報（の変化）に応じた常に新しい行動決定が可能となっている。

（三）自由意志の感覚

私たちが自覚する自由意志の感覚はこのような意識的な行動の中に生まれているのだが、常日頃、私たちはどのようなタイプの行動を自由なものとして感じているだろうか。こういった種類の行動に自由意志の感覚が伴うのであろうか。私自身の自由意志の感覚を調べてみれば、その行動が自由なものと感じられる要因は、少なくとも三つはあるかと思う。

〈第一〉は、認知行動の総和的システム（仮構された自己のシステム）の内的要素（例えば、情動、感情、思考、推理判断、欲求など）が行動の主原因や主動機となることである。外から強要された行動や、内的要素が全く関わらない行動には、自由意志の感覚は伴わない。例えば、頭に拳銃を突きつけられて強要された行動には、自由意志の感覚は発生しない。また、誤ってグラスを手からすべり落として壊した場合も、そこには内的要素が主動機として関わっていないため、自由意志を行使した感覚は生まれない。（仮構された）自己のシステム内の要素が、行動の主原因あるいは主動機であると明確に認知された場合に、自由意志の感覚は生じている。

そして〈第二〉は、行動選択の際に、複数の選択肢が存在することである。例えば、「好きなケーキを食べていいよ」と言われてケーキ箱を開けたとき、そこに毎のショートケーキしか無ければ、自由意志によりそれを選択した感覚は希薄であろう。そのケーキ箱の中に、モンブラン、チーズケーキ、チョコレートケーキ、プリンアラモードなど

というように、たくさんの種類のケーキが在れば、選択肢は広がって自由意志の感覚は強いものとなる。

そして〈第三〉は、行動決定までのプロセスに多くの内的要素が関与することである。浅く単純な情報処理ではなく、多数の内的要素が関与して深く複雑で全体的な視点で情報処理された結果にもとづく行動には、より深いレベルでの自由意志の感覚が伴うことになる。例えば、過去の経験や周囲の状況、自分自身の性格や能力、予測される結果などがじっくりと考慮されて行動選択に至った場合は、より深い意味での自由意志の感覚が伴う。欲求にもとづいた行動群の中でも、単純で即時的な生理的欲求や本能的欲求などから生じた行動よりも、複雑で高次レベルの統合を要する社会的欲求や自己実現的欲求などから生まれた行動には、より深い意味での自由意志の感覚が伴う。職業の選択や将来設計などは、より吟味されたかたちでの自由意志の行使と言えるだろう。

自己のシステムを仮構する内的要素群の関与が大きい行動ほど、自由意志の感覚は強くなり、深まっていく。逆に、それらの内的要素群が全く関与していない個体の行動には、自由意志の感覚は生まれにくい。認知行動のプロセスにおいては、自己のシステムを構成する内的要素群がはたらく程度に応じて、自由意志の感覚がそこに発生することになる。

意図的な決定が為されるとき、私たちは因果法則に支配されない自由な選択をして、自己の力を行使しているような感覚を持っている。しかしながら、実際のところは、意識場の中に特異点（実体的自我）が存在して、それが他の因子と独立無関係に自由意志という特異点由来の力を行使しているわけではない。

行動があるときには、そこには何らかの無意識的あるいは意識的な原因がある。意識的ならば、過去の記憶、感情、思考、意味、価値などの情報が無限の自由度の中で、競合、結合、調和、統一して、一貫した行動や計画が導かれている。その統合的活動の中で、意識場中の身体・精神の活動プロセスの内に限定された自己感覚が集束されることになり、同時に、そのプロセスにおいて自己システムの内的要素群の関与度に比例して、自由意志の感覚が生じることになる。ゆえに、自由意志は因果の法則と無関係ではあり得ない。自由意志による行動決定は、自己のシステム内の調和と統合の結果そのものである。自由とは無秩序や無規則を意味する言葉では決して無い。それは、そのシステム内での秩序性のもとにある。

東洋の視点から言えば、この自己の内の秩序性／統合性／調和性を最高の状態にしたいと願うならば、自己の最深なる内的性質と調和させなければならない。自己の本性を自覚し、それと合致した自己のシステムを築き上げたときにこそ、最も理想とすべき最

高の秩序ある状態がもたらされることになる。この自己のシステムが最高の調和と統合に至ったときにこそ、真に意義と価値のある自由意志が創造されることになる。身体と感情、理性が調和し、さらに自己の本性が自覚されたときにこそ、一切が調和、統合した真の自由は現れる。普段の私たちは、欲望の赴くまま好き放題に行動するのが自由と思っているかもしれない。しかしながら、自己の本性を自覚せぬまま、欲に塗れて苦に巻き取られた姿は、真の意味での自由とは程遠い状態にある。

哲学者の西田は、人間のどのような行動が最も自由なものとして感じられるかという質問に対しては、興味深い答えを残している。西田は『動機の原因が自己の最深なる内面的性質より出でた時、最も自由と感ずるのである⁽²⁾』と指摘する。私たちが心の奥底から自由と感じる行動というものは、心の奥底の人間本性から発する行動である。西田の洞察に従えば、人間本性の最深の内面的性質の発露が最高の自由な行動なのであり、それこそが最大の善となる。人間本性と自由、そして最善なる行動は、本来一つに連なるものである。

1 アンтониオ・R・ダマシオ「無意識の脳 自己意識の脳——身体と情動と感情の神秘」田中三彦（訳）講談社（2003）二三頁

2 西田幾多郎「善の研究」岩波書店（1950）一四二頁